

呼びかけ表現の使用パタンの日韓比較：
インターネットサイト上のメッセージを例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17083

呼びかけ表現の使用パタンの日韓比較 —インターネットサイト上のメッセージを例に—

人間社会環境研究科博士前期課程 1年 尹 秀美 (ユン・スウミ) *

< 概要 >

本研究ではインターネット・ファンサイトのメッセージを分析して日本人と韓国人の呼びかけ表現の使用パターンを比較した。その結果、日本人に比べて韓国人のほうがインターネット上のメッセージの中で、呼びかけ表現をより頻繁に使い、より多くのバリエーションを用いることが明らかになった。さらに、韓国人は一つのメッセージにおいて異なる種類の呼びかけ表現を使用したり、どのような呼びかけ表現を使えばいいかを悩む人もいたりしたが、そのような例は日本人のメッセージでは見られなかった。日本人が韓国人に比べて呼びかけ表現の選択に悩まされず、また呼びかけ表現のバリエーションも少ないのは、「さん」や「ちゃん」のような非常に便利な接尾辞があるためだと考えられる。それでは、呼びかけ表現にこのようにとても便利な接尾辞があるにもかかわらず、呼びかけの頻度が韓国人のそれより低い理由は何であろうか。

本研究では韓国人と日本人のメッセージを比較分析して韓国語では呼びかけ表現がコミュニケーションにおいて何かの特定の機能を持っているという仮説を検証し、今後より厳密な研究が必要であることを主張した。

< キーワード >

呼びかけ表現、インターネット、ファンサイトメッセージ、日本語、韓国語

* E-mail: smy8005@hotmail.com

<目次>

1. 序論

2. 資料と方法

3. 結果

- 3.1. 呼びかけ表現を使ったファンの数
- 3.2. 呼びかけ表現の使用頻度
- 3.3. 呼びかけ表現のバリエーション
- 3.4. メッセージのタイトルと呼びかけ表現

4. 考察

- 4.1. 呼びかけ表現を使ったファンの数
- 4.2. 呼びかけ表現の使用頻度
- 4.3. 呼びかけ表現のバリエーション
- 4.4. メッセージのタイトルと呼びかけ表現

5. 結論

文献

1. 序論

日本語と韓国語の呼称を社会言語的観点から分析した最新の研究に한(2006)がある。これは、従来の研究のようにお互いを直接呼ぶ時の呼びかけ表現より第3者に対して言及する際の呼称に焦点が当てられている。このように、従来呼称研究では相互行為における直接的な呼びかけ表現の使用を分析しているものはほとんどない(尹 2007)。そのような中で、尹(2008)は呼称の呼びかけの側面に着目し、夫婦の会話において日本人より韓国人のほうが呼びかけ表現を頻繁に用い、その種類も多様であることを指摘している。また、直接的な会話ではないが、電子メールのやり取りについて日韓比較をしている호우리(2006)は、私的な電子メールでは日本人に比べて韓国人は呼称を使って受信者を明示する傾向があると報告している。このように夫婦間の会話に限らずどのような関係や場面であっても日本人と韓国人は異なる呼びかけ表現のパターンを有していると言えそうである。

では、日韓の呼びかけ表現の使用の違いは、どのように説明されるだろうか。尹(2008)は、映画やTVドラマの夫婦間の会話の分析に基づいて、韓国では呼びかけ表現を、話者の意図を示唆する「コンテクスト化の合図(contextualization cues)」(Gumperz 1982)として使用しているという仮説を提出し、検証作業を行なった。ところが、この仮説がどの程度一般性をもちうるのかは不明である。そこで、本稿ではこの仮説を、さらに対象を拡張して検証するための予備調査として、インターネット上でのある特定の人物に対する一方向的なメッセージの書き込みにおける、日本人と韓国人の呼びかけ表現の使用法を調べることにした。たしかに、インターネット上のメッセージは、実際の対面による会話とは異なる言語行動であるが、とくに個人の情報を公開する必要がないので、呼びかけ表現の選択に制約が少なく、自由度がより高いと考えられる。したがって、日本人と韓国人の呼びかけ表現の異なる使用パターンの客観的資料になると考えられる。この資料を分析することによって、コンテクスト化の合図としての呼びかけ表現の使用という尹(2008)の主張が一般性をもちうるかどうかを検証することが可能になる。

2. 資料と方法

最近、日本と韓国ではスポーツの女子フィギュアスケートが話題になっている。そして、両国で特に注目を集めている選手がいる。日本の浅田真央選

手（以下浅田）と韓国のキム・ヨナ選手（以下キム）である。二人は 17 歳と年齢が同じで、そのほかにも国際競技の成績やファンの階層などいくつか共通する部分がある。二人にはインターネット上にそれぞれ日本語と韓国語で運営されるファンサイトがあり、ファンの人々が応援のメッセージなどを書けるカテゴリもある。ファンの人々が浅田とキムに書いたメッセージの中の呼びかけ表現を日韓比較のために分析対象とすることにした。

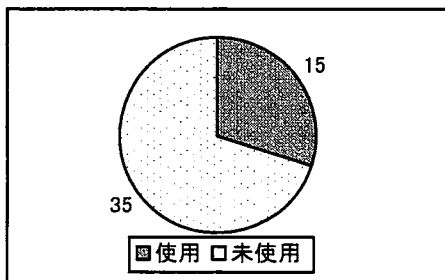
2007 年 12 月 1 日からそれ以降に書かれたメッセージを 50 個ずつ取り上げる。そして、話題やメッセージを書いたファンの人が重なること防ぐために、メッセージは①一日につき 1 個その日に一番早く書かれたものを取り上げ②ハンドルネームないしニックネーム (ID) が同じメッセージは取り上げないことにする。上の原則にしたがってメッセージを取り上げたところ、期間は浅田真央選手が 2007 年 12 月 1 日から 2008 年 1 月 22 日まで、キム・ヨナ選手が 2007 年 12 月 1 日から 2008 年 2 月 21 日までであった。期間にこのようなズレが生じた理由は、浅田のサイトのほうがキムのサイトよりメッセージの書き込みがほぼ毎日行なわれており、短期間で資料を集めることができたためである。

3. 結果

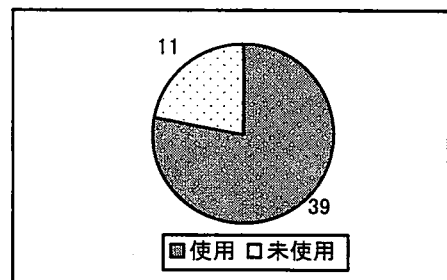
3.1. 呼びかけ表現を使ったファンの数

50 人のファンのうちメッセージにおいて呼びかけ表現を使った人は浅田 15 人、キム 39 人で、キムのほうが 2 倍以上多い。図 1 は浅田のサイトでの呼びかけ表現の使用者数、図 2 はキムのサイトでの呼びかけ表現の使用者数を表したものである。

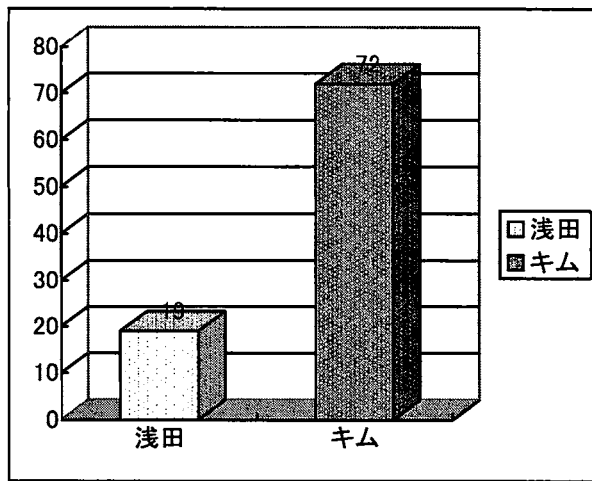
出現した全ての呼びかけ表現の数も、浅田が 19 回でキムは 72 回なのでキムのほうが 3 倍以上多いことが分かる(図 3)。



<図 1> 浅田サイトでの呼びかけ表現の使用者数



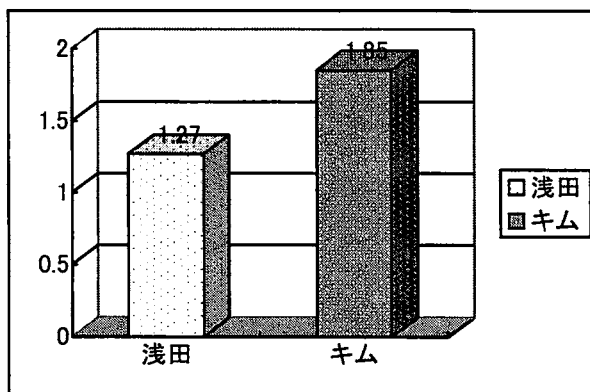
<図 2> キムサイトでの呼びかけ表現の使用者数



<図 3> 浅田とキムの 50 個のメッセージから出た呼びかけ表現の数

3.2. 呼びかけ表現の使用頻度

図 4 は一つのメッセージで使用される呼びかけ表現の平均数を表している。浅田の 15 個のメッセージの中で呼びかけ表現が全部で 19 回使用された。つまり、一つのメッセージで平均 1.27 回呼びかけ表現が使われたことになる。一方キムでは、39 個のメッセージの中で 72 回の呼びかけ表現が出現した。一つのメッセージで平均 1.85 回呼びかけ表現が使われていることになる。



<図 4> 一つのメッセージで使用される呼びかけ表現の平均数

3.3. 呼びかけ表現のバリエーション

浅田では19回呼びかけ表現が使われたが、バリエーションは2種類しかなかった。「真央ちゃん」が17回の出現で圧倒的に多く、それ以外は「真央さん」が2回のみである。キムは全部で13種類のバリエーションで呼ばれていた(図5)。頻度数の高い順に並べると、名前「연아(yuna)」+「양¹(yang)」の연아양(yunayang) (23回)、名前「연아(yuna)」+選手の意味である「선수(sunsu)」の「연아선수(yunasunsu)」(15回)、名前「연아(yuna)」+「누나²(nuna)」 「연아누나(yunanuna)」(8回)、性と名前「김연아(kimyuna)」+選手の意味である「선수(sunsu)」の「김연아선수(kimyunasunsu)」(6回)、名前「연아(yuna)」+「언니³(onni)」の「연아언니(yunaoni)」(5回)、「언니(oni)」(3回)、「누나(nuna)」(3回)、「연아(yuna)」+「씨⁴(ssi)」の「연아씨⁵(yunassi)」(2回)、「김연아(kimyuna)」+「숙녀⁶(suknyo)」+「님⁷(nim)」 「김연아숙녀님(kimyunasuknyonim)」(2回)、「연아(yuna)」+「누님⁸(nunim)」 「연아누님(yunanunim)」(2回)、「김연아(kimyuna)」+「양(yang)」 「김연아양(kimyunayang)」(1回)、「연아(yuna)」+「동생⁹(dongsaeng)」 「연아동생(yunadongsaeng)」(1回)、「연아(yuna)」+「님(nim)」 「연아님(yunanim)」(1回)である。

1 (結婚していない女性の性や名前の後ろに使われ) 目下の人を少し上げて言及したり呼ぶ言葉。(『표준국어대사전』を参照)

2 同じ親から生まれたり、親戚の同じ世代の人同士で、男性が年上の女性を言及したり呼ぶ言葉。人同士で、年下の男性が年上の女性をむつまじく言及したり呼ぶ言葉。

3 同姓の上の兄弟を示す言葉、主に女性の兄弟の仲でよく使われる。女性の人同士で、自分より年上の女性を上げてむつまじく呼ぶ言葉。

4 依存名詞、(成年になった人の名字や姓名、名前につけて) その人を高めて呼んだり指したりする言葉で、大体同僚や目下の人に向かって使う。

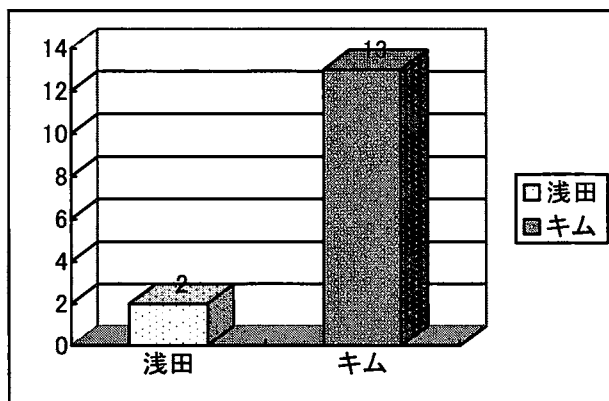
5 依存名詞、(成年になった人の名字や姓名、名前につけて) その人を高めて呼んだり指したりする言葉で、大体同僚や目下の人に向かって使う。

6 淑女。成人になった女性を美しく言う言葉。

7 (人の名前や性の後ろに使われ) その人を上げて言う言葉。「씨」より尊敬の意味を表す。

8 「누나」の尊敬語。

9 同じ親から生まれたり親戚の同じ世代の人同士で目下の人を言う言葉。



<図 5>メッセージ中で使用された呼びかけ表現のバリエーション数

3.4. メッセージのタイトルと呼びかけ表現

インターネット上のメッセージやメールの特徴はよくメッセージにタイトルをつけることである。浅田とキムへのメッセージにもほとんどタイトルがつけられているが、タイトルの形式も少し異なるパターンを示す(表1を参照)。「真央ちゃんへ」のような「～へ」の形式は浅田が7個でキムが6個で大体同じであるが、タイトルで呼びかけ表現を使用しているメッセージは浅田が6個、キムが23個で4倍近く多い。

タイトルの形式	浅田真央	キム・ヨナ
～へ(例 へ)	7個	6個
呼びかけ	6個	23個
タイトルなし	4個	0個
その他	33個	22個

<表 1>浅田とキムに送るメッセージのタイトルの形式

4. 考察

4.1. 呼びかけ表現を使ったファンの数

インターネット上でメッセージを書く際、浅田の日本人のファンに比べてキムの韓国人ファンが、より多く呼びかけ表現を使う。浅田とキムのファンサイトを見ると、それぞれのサイトでは、浅田とキムにだけではなく浅田の姉で同じフィギュアスケート選手である浅田舞とキムのお母さんにもメッセージを書くことができるようになっている。浅田のほうは真央と舞に書く

メッセージが同じカテゴリになっていて、キムのほうは「キムへ」と「お母さんへ」のように別々のカテゴリになっている。したがって、浅田のサイトでは浅田に対してのメッセージであるか舞に対してのメッセージであるかを明示的に区別する必要があるだろう。それにもかかわらず、キムに比べて呼びかけ表現があまり使われてないのは、呼びかけ表現の使用に関する日本人と韓国人の違いを表していると思われる。

4.2. 呼びかけ表現の使用頻度

呼びかけ表現が使われているメッセージを見ると、呼びかけ表現の使用頻度は一つのメッセージに対し浅田は平均 1.27 回、キムは 1.85 回である。このような差が出る理由は二点考えられる。まず、浅田のファンに比べてキムのファンはメッセージの本文だけではなく、タイトルでも呼びかけ表現をよりたくさん使っていることがあげられる（浅田 6 個、キム 23 個、表 1 を参照）。そしてもう一つは、浅田のファンは呼びかけ表現を全てメッセージの開始部や終結部に使うが、キムのファンは位置を問わず呼びかけ表現を自由に使う傾向があることである。

4.3. 呼びかけ表現のバリエーション

呼びかけ表現のバリエーションに関して、浅田とキムの間で顕著な違いが見られた。浅田は「真央ちゃん」と「真央さん」の二つのバリエーションでしか呼ばれていない反面、キムは上に挙げたように 13 種類の多用なバリエーションで呼ばれている(3.3.)。このように呼びかけ表現のバリエーションが極端に異なる理由として考えられるのは、まず韓国の呼称システムが重要な役割を果たしているということである。韓国では自分のきょうだいだけでなく、自分より年上の人に対して「お姉さん」や「お兄さん」と呼ぶことが出来る。また同じ「お姉さん」でも自分が男性か女性かによって使用する呼びかけ表現がことなる。例えば、キムより年下のファンの場合、男性はキムを「누나(nuna)」で女性は「언니(onni)」で呼ぶ。

ところが、インターネットサイト上では個人の情報を明らかにする必要がないにもかかわらずこのような自分の社会的条件が特定できる様々な呼びかけ表現を使用する。それは、韓国ではインターネット上のメッセージを書くことにおいて、呼びかけ表現が何らかの役割を果たしているという証拠になりうる。また、キムへのメッセージには、最初の部分で“何と呼べばいいかわからない”という内容がよくあったが、それでも呼びかけ表現を避けないでたくさん使用されているのもその証拠になる。

特に、キムのサイトのメッセージには浅田のそれには見られない現象があるが、それは、一つのメッセージに異なる呼びかけ表現が使用されることである。以下に、その例を示す。

例 1) 2007 年 12 月 25 日に書かれたキムへのメッセージ
(太字はタイトル、四角の中は呼びかけ表現)

메리크리스마스 **연아양**~~~
메리크리스마스 **ヨナヤン**~~~

항상 응원하고 있어요~!
いつも応援しています~!
언제 어디서나 밝고 씩씩하게~! 항상 화이팅~!
いつもどこでも明るくたくましく~!いつもファイト~!
많은 팬들이 응원하고 있어요~
たくさんのファンたちが応援しています~
메리크리스마스~!
메리크리스마스~!
김연아양~~!~~!~~!~~!
김·ヨナヤン~~!~~!~~!~~!
새해복 많이 받으시구 내년에는 더 멋진 한해 보내시길 바래요~~~
明けましておめでとうございます。来年はもっと素敵ない年を過ごして欲しいです~~~
으쌔으쌔~!
ファイト~!

上の例を見ると、最初は名前「연아(yuna)」+「양(yang)」の「연아양(yunayang)」で呼んでいるが、メッセージの後半部では性と名前の「김연아(kimyuna)」+「양(yang)」の「김연아양(kimyunayang)」で呼んでいる。50 個のメッセージのうち 5 個のメッセージで複数の異なる呼びかけ表現が使用されている。

4.4. メッセージのタイトルと呼びかけ表現

「~へ」の形式のタイトルは浅田とキムがそれぞれ 7 個と 6 個で大体同じであるが、その内容を見ると異なる点がある。浅田の場合、タイトルで「真

央ちゃんへ」など「～へ」の形式を用いたメッセージでは、7個のメッセージの内、本文で呼びかけ表現が使用されたメッセージは1個もない。一方、キムの場合は、6個中4個が本文で呼びかけ表現を使用している。浅田のファンはタイトルで「真央ちゃんへ」などで名宛人を特定すると本文で繰り返して呼びかけ表現を使わない傾向があることが明らかになった。他方、キムの韓国人ファンはタイトルで受け手を特定しても本文でまた呼びかけ表現を使用する。これは、呼びかけ表現がただ受け手を特定する役割、つまり注意を喚起する役割以外に他の機能を持っていると考えられる(例2と3を参照)。

例2) 2007年12月31日に書かれた浅田へのメッセージ
(太字はタイトル、四角の中は呼びかけ表現)

真央ちゃんへ

先日、メダリスト・オン・アイスで初めて生のフィギュアスケートを鑑賞させて頂きました。生のスケートは本当によかったです。胸が震えました!!!

素敵な演技をありがとうございました。

真央ちゃんの向上心を見習って、私も2008年妥協することなくがんばりたいと思います。世界選手権で、真央ちゃんの目標が達成できるよう心から応援しています。

例3) 2008年2月17日に書かれたキムへのメッセージ
(太字はタイトル、四角の中は呼びかけ表現)

To 연아누님

To ヨナヌニム

연아누님 오늘 꿈에서 연아누님 봤습니다.

ヨナヌニム 今日ヨナヌニムの夢を見ました。

이야기하는 꿈 이던데요.

話しをする夢でした。

마냥 행복했습니다.

とても幸せでした。

연아누님 빨리 낚으셔서 금메달 싹쓸은 물론 우아한 자세로 사람들의 인기도 끌어야죠.

ヨナヌニム 早く回復して金メダルはもちろん優雅な姿勢で人の人気も集めましょう。

나는 이꿈 이후로 연아누님의 광팬보다 훨씬 높은 팬이 되어야겠다고 생각했습니다.

僕はこの夢を見てからもっとヨナヌニムのファンになろうと思いました。

5. 結論

本稿では日本の浅田真央選手と韓国のキム・ヨナ選手のインターネット・ファンサイトのメッセージを、呼びかけ表現を中心に分析した。その結果、日本人のファンより韓国人のファンのほうがより多様な呼びかけ表現を使用し、またその使用頻度も高いことが分かった。そして、韓国人はメッセージのタイトルで呼びかけ表現をよく使って受信者を特定する傾向があり、同一人物が一つのメッセージの中で異なる種類の呼びかけ表現を使う場合もあることも判明した。

キムのほうのメッセージの中には、最初の部分で“何で呼べばいいかわからない”という文章が書いてあったものもあったが、日本語には「さん」や「ちゃん」など韓国人からするととても便利な接尾辞がある。韓国語には「さん」や「ちゃん」のように幅広く使用できる接尾辞はない。このように言語的な制約があるにも関わらず、韓国人は日本人に比べてより多く呼びかけ表現を使う理由は何であろうか。それは、韓国語では呼びかけ表現がコミュニケーションの中である機能を果たしているからであると考えられる。

本調査の結果に基づき、今後スターとファンという関係だけではなく、実際に面識がある関係などさまざまな人間関係での電子メールでの呼びかけ表現を調査し、さらに電子メールだけではなく会話などでの呼びかけ表現の使用傾向とその具体的な機能を明らかにする必要があると思われる。

文献

- Gumperz, J. J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 모우리 미나(2006) 전자 메일 텍스트 구조 연구; 한.일 전자메일의

비교를 중심으로, 연세대 교육대학원.

- 한영옥 (2006) 「한·일 호칭에 관한 사회언어학적 연구」 중앙대학교.
- 『표준국어대사전』 (http://www.korean.go.kr/08_new/index.jsp) .
- 尹 秀美 (2007) 「日韓の夫婦間の呼びかけ表現 —先行研究の問題点と今後の展望—」『論文集』2, 85-96, 金沢大学経済学部社会言語学演習.
- 尹 秀美 (2008) 「呼びかけ表現を好む韓国人、呼びかけ表現を避ける日本人 —コンテクスト化の合図という観点から—」『韓国語学年報』第 4号 (印刷中) .

調査資料

浅田真央のファンサイト www.maomaiasada.com

キム・ヨナのファンサイト <http://cafe.daum.net/figureyeona>

Choice of an address form is important from a point of view of politeness because it depends on the interactional relationship

Graduate School of Human and Socio-Environment Studies
1st-year master's degree student Sumi YOON

Address Forms between partners of a married couple in
Korean and Japanese
-- A critical survey for a further research --

<영문초록>

키워드 : 직접호칭 표현, 부분, 일본어, 한국어

중요한 과제라 할 수 있다. 사회적·관리적 요인의 변화에 대응하는 경우에 따른 연구 또한 앞으로의 있는데, 이러한 것들은 거의 조사가 되어있지 않았다. 따라서 필요가 있다. 또한 호칭표현은 장면의 변화에 따라 바뀌는 경우가 요인을 확대하여 두 사람의 상호관계를 적절하게 사용 할 수 있도록 할 고려하지 않았으므로, 앞으로의 연구에서는 호칭선택에 관한 사회적 지역이나 학력 등 호칭표현의 선택에 영향을 주는 사회적 요인을 본 고에서 다른 선행연구는 모두 설문 조사방법을 사용하고 있는데, 확인하였다. 그러나 선행연구에는 몇몇 공통적인 문제점이 보였다. 먼저 있다는 것, 또 연립과 장면이 호칭표현의 선택에 영향을 미친다는 것을 정리를 한 것이다. 그 결과 양국의 부분 모두 다양한 호칭을 사용하고 부부의 직접 호칭표현을 다른 선행연구를 조사하여 연립과 장면 별로 부부는 서로 상대방을 어떻게 부를까? 묻고 는 일본인 부부와 한국인

<국문초록>

인간사회환경연구과 박사전기과정 1년 윤수미**

- 한·일 부부간 직접호칭 표현* -
선행연구의 문제점과 앞으로의 전망

between participants of a conversation, i. e. it reflects social and psychological distance between the interlocuters and/or situations in which they participate. Use of address forms between partners of a married couple has recently changed in Korea and Japan because the relationship between them has changed and it affects the choice of the terms. Studies on this aspect have been increasing last decade.

The aim of this article is twofold: (1) to review studies on the use of address forms of Japanese and Korean couples from the aspects of age and situation; (2) to point out a statistical problem that is shared by the reviewed studies and to suggest a direction for a further research.

Key Words: address form, married couple, Japan, Korea

* 본고는 필자가 일본어로 작성한 논문을 다시 한국어로 번역하여 쓴 것임

** E-mail: smy8005@hotmail.com

<목차>

1. 서론

1.1 연구목적

1.2 조사방법

2. 본론

2.1 일본인 부부의 호칭 표현

2.1.1 연령 별

2.1.2 장면 별

2.2 한국인 부부의 호칭 표현

2.2.1 연령 별

2.2.2 장면 별

3. 결론

3.1 선행연구의 한계

3.2 향후 연구과제

참고문헌

1. 서론

1.1 연구목적

호칭표현은 커뮤니케이션 행동에 있어서 매우 중요한 역할을 한다. 왜냐하면 참가자들의 사회적·심리적 거리가 호칭에 나타나며, 또한 그 표현을 적절히 사용함으로써 상대방과의 거리를 조절 하거나, 제 3 자에게 그 관계가 어떤 것인가를 제시할 수도 있기 때문이다. 이러한 호칭표현에는 언급표현과 직접표현의 두 가지가 있다. 전자의 예로는 다른 사람에게 자신의 남편에 대해 이야기 할 경우, 대화상대가 손윗사람인가 그렇지 않은가에 따라 「主人」이나 「だんな」로 구별하여 사용하는 것을 들 수가 있다. 그리고 후자의 예로는 보통 자신의 남편을 「○○ちゃん」이라고 부르는 사람이 아이들과 같이 있는 장면에서는 자신의 남편을 「お父さん」이라고, 또한 말다툼을 할 때는 「あなた」라고 부르는 것들을 들 수가 있다. 항상 자신을 「○○ちゃん」이라고 부르던 부인이 「あなた」라고 부르는 것을 들은 남편은 어쩌면 지금 부인의 기분이 좋은 상태가 아니라는 것을 느낄지도 모른다. 특히 부부간의 직접호칭 행동은 거의 매일 행해지고 있어 어떤 특정한 호칭표현이 습관이 될 가능성이 높지만, 일본인과 한국인 부부는 장면에 따라 다른 호칭표현을 구별해서 사용하고 있다.

이렇게 일본인과 한국인이 부부간의 호칭표현을 장면 별로 구별하는 원인은 무엇일까? 종래의 연구는 제 3 자에게 자신의 남편이나 부인에 대해서 이야기 할 때의 호칭에 주목, 자신과 배우자와 상대방과의 상하친소에 그 원인이 있음을 밝혔다. 그러나 대화상대의 행동을 조절하는 기능을 가지고 있다는 점에서, 직접적 호칭표현은 아주 중요한 대상임에도 불구하고, 지금까지는 별로 주목을 받지 못했다.

일본어와 한국어의 호칭표현은 그 종류가 매우 다양하여 양국에서는 호칭표현을 선택할 때 항상 고민을 한다. 위에서도 부부의 호칭표현을 예로 들었는데, 일본이나 한국 영화 속의 부부는 장면 별로 아주 다양한 호칭을 사용하는 것을 자주 볼 수 있다. 또한 일본과 한국 부부의 직접호칭 표현의 공통점으로 시대에 따른 변화와 장면에 따른 변화를 들 수가 있다.

최근 일본과 한국에서, 공통적인 사회적 현상의 하나로 여성의 사회적 지위의 순차적 상승을 들 수가 있다. 여성도 남성과 동등한 교육을 받게 됨으로써 여성의 취업률도 증가, 경제적 독립이 가능하게 되었다. 그에 따라 한일양국에서의 부부관계에도 변화가 보이게 되었다. 그 변화는

회자의 연립이 언어사용과 상호 관계를 가지고 있는 것은 사실일 것이다. 일련인 부부가 서로 상대를 직접 부를 때의 표현을 연립별로

2.1.1 연립 별

일련의 부부는 서로를 어떻게 부를까? 이 장에서는 일련의 부부가 실제로 서로 어떻게 부르고 있는지, 그리고 그 호칭은 연립이나 장면 별로 어떻게 변하는지를 선행연구에 입각하여 정리한다.

2.1 일련인 부부의 호칭 표현

2. 본문

이들 논문 모두에서 연립과 장면 별 호칭표현의 변화를 동시에 조사하고 있는 것은 아니며, 연립 별 조사만을 또는 장면 별 조사만을 행한 것도 있다. 그러므로 본 고에서는 각 논문 중에서 논하는 주제와 관계 있는 부분만을 클라 적용한다.

환 이 응련 (1987) 과 환인 양국을 비교한 환선회 (1994, 1996), 이 용덕 일련 부부의 호칭을 다물 米田 (1986) 와 한국 부부의 호칭을 대상으로 장면이라는 시점으로 나누어 정리한다. 조사대상이 되는 선행연구는, 나누어 정리한다. 다음으로 양국의 부부간 직접호칭을 연립과 종래의 선행연구에 입각하여 그 성과를 일련인 부부와 한국인 부부로 본 고는 환·인 부부간의 직접호칭 표현에 관한 전망논문이므로, 우선

1.2 조사방법

가우성을 전망하는 것이 있다. 정리함으로써, 선행연구의 문제점을 지적하고, ② 앞으로의 연구 부부간의 직접호칭 표현을 연립과 장면에 따른 변이라는 관점으로 본 고의 목적은 ① 지금까지의 선행연구에 입각하여 일련과 한국의 부부는 부부가 늘어나고 있다.

단편에게 친숙명칭인 「오빠」라고 부르거나 남편은 부인의 이름을 부부 고유 호칭인 「여보」와 「당신」을 대신하여 결혼 전 연애시절의 「대신에 서로의 이름을 부르는 부부가 많아졌다. 한편 한국에서는 일련의 젊은 부부 사이에서는 전통적인 호칭법인 「お前」와 「おな」 부부간의 호칭표현의 사용에도 영향을 주는 것으로 보인다. 예를 들어

조사한 연구는 이용덕(1998)이 있다. 이용덕은 福岡県大木町の 60 가정을 대상으로 1994 년 10 월부터 12 월까지 직접 조사를 실시했다. 조사대상자는 여성이 98 명, 남성이 141 명인데, 남녀의 비율이나 연령별 비율이 맞지 않으므로, 단지 어느 연대의 남편과 부인이 어떻게 서로를 부르고 있는가를 중심으로 그 특징을 살펴보기로 하였다.

이용덕의 결과를 보면, 일본인 부부는 이름, 응답사(「おい」「ねー」「ちよっと」등), 친족명사(「お父さん」「お母さん」등), 대명사(「あなた」「お前」등) 등 다양한 말로 서로를 부르고 있다는 것을 알 수 있다. 특히 친족명사를 보면, 자신의 배우자를 아이의 시점에서 부르는 경향이 있는데, 그 중에서도 「お父さん」과 「お母さん」이라는 말이 압도적으로 많다.

연령 별로 보았을 때 두드러지는 특징은 60 대 이상의 부부 사이에서는, 상대를 「じいちゃん」이나 「ばあちゃん」이라고 부르는 것을 알 수 있다. 이것은 50 대 이하의 부부인 경우에는 전혀 보이지 않는 현상이다. 또한 20 대나 30 대와 같은 젊은 부부는 배우자를 「お父さん」이나 「お母さん」과 같은 친족명사와 함께 「이름」「이름+さん」「이름+ちゃん」과 같은 이름을 사용하여 부르는 경우가 많다. 이러한 결과로부터 이용덕은 일본인 부부는 다양한 호칭을 사용하여 서로를 부르고 있는데, 특히 가정내의 최연소자의 시점에서의 친족명사로 부르는 것이 일반적인 경향이라고 추측하고 있다.

그러나 이 조사 결과만으로 일본의 전반적인 경향을 나타내는 것은 조금 무리가 있다. 다시 말하면, 1994 년경의 일본 전국의 부부가 반드시 이렇게 불렀다고는 말할 수 없을 것이다. 이것은 일본의 어느 지역의 경향이라고는 말할 수 있지만, 일본의 전체적 경향은 아니다.

말은 다양한 원인에 의해 달라지며, 지역 또한 그 주된 원인 중 하나일 것이다. 그리고 또 한가지 이 조사에서의 의문점은, 조사 대상이 되는 부부의 수에 있다. 연령별로 많이 사용되는 호칭을 조사할 때 반드시 지켜져야 할 필요가 있는 연령별 조사 대상자의 수가 꽤 다르다는 것이다. 이용덕의 조사대상은 40 대의 수가 83 명으로 가장 많은 반면, 70 대 이상은 21 명, 20 대는 11 명이다. 최근 20 대를 지나 결혼을 하는 사람이 늘어나는 등, 현실적으로 중년 부부보다 젊은 부부의 수가 적은 것은 사실이지만, 특히 그 종류가 다양한 호칭 조사를 함에 있어서는 조사대상자의 수를 같거나 어느 정도 비슷한 비율로 하여 조사할 필요가 있다. 조사 대상자의 수가 많으면 많을 수록 호칭의 변종이 많아지는 것은 당연한 일이기 때문이다.

2. 1. 2 장면 별

각각의 화자는 일상생활의 다양한 장면에 대응하여, 그 장면에서 가장 적합한 말을 선택한다. 이야기 상대방이 다르다면 물론 사용하는 말도 달라지겠지만, 혹시 상대방이 같은 사람인 경우라도, 처해있는 상황에 따라 달라질 수 있다. 실제로 일본 부부의 호칭은 그 장면에서 바뀌는 경우가 있다. 여기에서는 아이가 있는 장면과 아이가 없는 장면, 그리고 보통 때와 말다툼을 할 때의 장면에서 사용되는 부부의 호칭표현을 선행연구에 입각하여 정리한다.

米田(1986)와 홍민표(1999)는 일본에서 부부의 호칭을 들만 있는 장면과 아이 앞에서의 장면으로 나누어 설문 조사를 실시했다. 두 논문 모두 연령차는 고려하고 있지 않다. 米田은 1986년 5월, 수도권에 살고 있는 부부 185 쌍을 조사대상으로 하였다. 조사 대상자 중에는 특히 사립여자대학교 학생들의 부모나 아사히 문화센터의 수강생과 그 남편들이 포함되어 있다. 홍민표는 1998년 11월부터 1995년 5월까지 일본인 262명을 대상으로 설문 조사를 실시했다. 조사대상자의 주거지는 도쿄, 오사카, 기타큐슈(東京, 大阪, 北九州)의 3 지역으로 그 비율은 각각 13.9%, 69.2%, 16.9%이다. 또, 조사에 응한 부인의 직업은 주로 전업주부와 공무원이 많다. 반면 홍민표는 아이가 있는 부부만을 대상으로 하고 있다. 따라서 본고에서는 米田의 조사 결과 중 아이가 있는 부부의 결과만을 취급하도록 하였다.

우선 米田(1986)에 의하면 부인이 남편을 부를 때 가장 많이 사용하는 호칭은, 들만 있는 장면과 아이가 있는 모두 「おとうさん」이 가장 많다. 그러나 그 비율은 꽤 다른데, 들만 있는 경우는 27.1%, 아이가 있는 장면에서는 44.1%이다. 그리고 다음으로 들만 있는 장면에서 가장 많이 사용되는 것은 「ねえ」「ちよっと」와 같은 응답사(22.2%)인 반면, 아이가 있는 장면에서는 아이의 시점에서의 호칭인 「パパ」(27.1%)이다. 이것을 보면 확실히 아이의 유무는 부부간의 호칭에 꽤 영향을 주고 있는 듯이 보인다. 아이 앞에서는 친족명사가 많이 사용되고 있다. 이것은 남편이 부인을 부를 때도 같은데, 들만 있는 장면에서는 부인을 이름만으로 부르고 있다고 대답한 사람이 24.6%로 가장 많았고, 「おかあさん」으로 부르고 있다고 대답한 사람은 16.1%이다. 그런데 아이 앞에서 이름만으로 부른다는 사람은 불과 13.6%로 「おかあさん」이라고 부르는 사람이 33.1%로 가장 많아지는 현상이 보인다.

홍민표(1999)의 결과도 같은 경향을 나타내고 있다. 부인이 남편을

부를 때는 둘만 있는 장면이든 그렇지 않은 장면이든 가장 많이 사용되는 것은 「おとうさん」이지만, 그 비율은 55.4%와 77.7%로 꽤 많은 차이를 보인다. 남편이 부인을 부를 때는 米田의 결과와 조금 달리, 아이의 유무에 상관없이 「おかあさん」이 가장 많은 사용되고 있는데, 그 비율은 부인의 경우와 마찬가지로 둘만 있는 장면에서는 24.8%에서 아이가 있는 장면에서는 46.9%로 증가한다.

米田(1986)와 홍민표(1999)의 조사가 거의 같은 결과를 나타내고 있는 것으로 보아, 부부의 호칭은 둘만 있는 장면에서와 아이가 있는 장면에서 각각 달라지며, 아이가 있는 장면에서는 「おとうさん」이나 「おかあさん」과 같은, 아이가 자신의 부모를 부를 때의 친족명사를 사용하는 경우가 어느 정도 예측 가능하다. 그렇다고 해서 이것이 현실을 반영하고 있다고만 할 수 없다. 두 연구 모두 어느 특정 지역에서 어느 특정 직업을 가지고 있는 사람들을 대상으로 조사를 하였으며, 이것이 일본의 전체적인 경향이지 않을까라고 기술하고 있지만, 가령 다수의 지역에서 다양한 직업을 가진 사람을 대상으로 이러한 조사를 실시하면 다른 결과가 나오거나 두 연구에서는 전혀 언급되지 않은 새로운 말로 자신의 배우자를 부르거나 하는 지역이 있을 가능성도 없지 않다. 그리고 부부나 아이의 연령도 고려할 필요가 있다. 예를 들어 아이가 유치원생인가 대학원생인가에 따라 충분히 다른 호칭을 선택할 가능성이 있기 때문이다.

*

米田(1986)는 부부가 말다툼 중에 자신의 배우자를 어떻게 부르지도 조사하였다. 그 결과는 대칭대명사(부인: 44%, 남편: 48%), 이름(부인: 20%, 남편: 18%), 부칭(父稱) 또는 모칭(母稱)은(부인: 18%, 남편: 5%)으로 대칭대명사의 비율이 현저히 많이 지고 있다. 구체적으로는 부인이 사용하는 것으로는 「あなた」가 대부분이고, 남편의 경우에는 「おまえ(32%)」「あんた(9%)」「きみ(6%)」 등이 포함되어 있다.

부부가 말다툼 중에 왜 상대방을 대칭대명사로 부르는 것일까. 왜 부인은 대부분 「あなた」로 부르는데 반해 남편의 경우에는 변종이 나타나는 것일까. 米田는 이러한 의문점에 대해 고찰하고 있지 않다. 일본어 모국어 화자이지 않은 필자는 오히려 아이가 있는 장면과 그렇지 않은 장면의 호칭의 차이는 어느 정도 이해가 가지만, 말다툼 중에 부부가 주로 대칭대명사를 사용하여 호칭한다는 결과가 이상하게

생각되며 흥미를 가지게 되었다.

2.2 한국인 부부의 호칭 표현

이 장에서는 한국인 부부가 서로 상대방을 어떻게 호칭하는가를 선행연구에 입각하여 정리한다. 한국인 부부 역시 연령이나 장면에 따라 다양한 호칭을 사용하고 있으므로, 일본인 부부의 경우와 마찬가지로 연령 별과 장면 별로 나누어 기술하도록 한다.

2.2.1 연령 별

한국에서 부부의 호칭을 연령별로 조사한 연구는 이옥련(1987)과 한선희(1994, 1996)와 전장에서든 다룬 이용덕(1998)이 있다. 이옥련(1987)은 1986년 9월부터 11월까지 한국의 인천·경기도·광명시·송탄시·서울에 살고 있는 20대에서 60대까지의 부부를 대상으로 설문 조사를 실시, 그 결과를 연령별로 고찰하고 있다.

이옥련에 의하면 한국의 20대 부부의 호칭의 특징은, 부인을 부르는 말로는 「여보」가 대표적이며, 남편을 부르는 말로는 「자기」와 「이름+씨」가 대표적이다. 30대는 부인을 부를 때 「여보」와 「아이의 이름+엄마」, 남편을 부를 때 「아이의 이름+아빠」와 「여보」의 순으로 많이 사용되고 있다. 40대에서 남편은 부인을 거의 대부분 「여보」로 부르고 있고 부인은 「아이의 이름+아빠」와 「여보」가 비슷한 빈도로 사용되고 있다. 그리고 50대와 60대의 경우에는, 남편과 부인 모두 특별히 호칭을 사용하지 않는다고 대답한 사람이 가장 많으며, 호칭을 사용하는 사람 중에서는 남편과 부인 모두 「여보」로 상대방을 부르며 다른 호칭은 보이지 않는 경향이 있다.

다음으로 한선희는 「夫をどう呼ぶか(남편을 어떻게 부를까)」(1994)에서 서울 수도권에 사는 주부 122명을 대상으로 조사, 「妻をどう呼ぶか(부인을 어떻게 부를까)」(1996)에서는 서울 수도권에 사는 남성 106명을 대상으로 조사하였다. 먼저 부인이 남편을 부를 때 가장 많이 사용된 표현을 연령별로 보면, 20대만이 「자기」가 가장 많았고, 30대 이상은 「여보」의 사용률이 가장 많아진다. 이것은 남편이 부인을 부를 때도 같은데, 20대 남편은 자신의 부인을 「자기」로 부르는 사람이 가장 많으며, 30대 이상은 「여보」로 부르는 사람이 가장 많다.

이용덕(1998)은 1994년 10월부터 12월까지 한국 대구의 어느 대학교 학생을 대상으로 자신의 부모 등이 가정에서 사용하고 있는 부부간

호칭을 설문 형식으로 조사하였다. 조사대상자는 여성이 234 명, 남성이 264 명으로 전부 494 명이다. 일본인 부부의 조사에 비해 남녀 비율은 거의 비슷하지만, 연령별 비율은 고려되지 않았으므로, 연대와 성별 별로 특징을 들기로 하겠다. 이용덕에 의하면 20 대 남성 「어이」 「야」 와 40 대 남성 「어이」 와 60 대 이상 부부를 제외하고는, 어느 세대의 부부에서나 서로 「여보」 로 부르는 부부가 가장 많다. 그리고 60 대 이상의 부부는 응답사나 「할멈」 「영감」 이나 「손주의 이름+할머니 (할아버지)」 에 해당하는 호칭의 비율이 높아지는 것이 눈에 띈다.

이 세 논문을 전체적으로 비교해 보면 「여보」 라는 말을 남녀 모두 자주 사용한다는 것 이외에 아무런 공통점을 찾을 수가 없다. 이옥련 (1987) 과 한선희 (1994) 만을 보면 20 대의 부인이 남편을 부를 때 「자기」 라는 말로 부르고 있다고 보고되어 있지만, 이용덕 (1998) 의 조사에서는 다른 결과가 나왔다.

이옥련과 한선희의 조사시기는 꽤 차이가 나지만 한선희와 이용덕의 조사 시기는 거의 같다. 이러한 결과가 나온 것은 서울 부근과 대구 부근이라는 지역적 요인이 영향을 주었다고 생각할 수 있다. 그렇다고 하여 거의 같은 지역을 조사대상으로 한 이옥련과 한선희의 결과가 전부 같은 패턴을 나타내고 있는 것 또한 아니다. 그러므로 여기서 서울과 대구라는 두 지역을 비교하여 지역차만을 언급하는 것도 크게 의미를 가진다고는 할 수 없을 것이다.

또한 각 논문의 조사 방법으로부터 결과의 신뢰성을 떨어트리는 요인이 몇 가지 정도 보인다. 이옥련은 설문 조사를 자신의 학생들에게 과제로서 실시, 이용덕은 자신의 학생을 대상으로 대면조사를 실시했다. 학생이 교원에게 솔직히 가정내의 상황을 얘기할 수 있는지 없는지는 생각해 볼 필요가 있다. 한선희는 조사대상을 전부 주부에 한정하고 있는데, 말과 관련한 직업이라는 큰 요인을 고려하고 있지 않으며, 모든 부인이 전업주부이지는 않으므로 직업이나 학력을 고려한 조사를 할 필요가 있었다고 생각한다.

2.2.2 장면 별

한국인 부부의 호칭 표현을 장면 별로 조사한 연구에는 한선희 (1994, 1996) 와 홍민표 (1999) 가 있다. 두 연구 모두 일본인 부부의 호칭 표현의 경우와 마찬가지로 부부 둘만 있는 장면과 아이의 앞이라는 두 장면에서 서로 어떻게 부르고 있는가를 설문 방법으로 조사했다.

한선희 (1994) 는 전장에서 소개한 부부의 연령별 호칭표현 조사 외에도

장면 별로도 조사 했는데, 조사 대상자는 연령별 조사의 경우와 동일하다. 「夫をどう呼ぶか(남편을 어떻게 부를까)」(1994)에서는 서울 수도권에 사는 주부 122 「妻をどう呼ぶか(부인을 어떻게 부를까)」(1996)는 서울 수도권에 사는 남성 106 명을 대상으로 조사를 하였다. 한선희(1994)에 의하면 들만 있는 장면에서 부인이 남편을 부르는 표현은 「여보」가 48.4%로 가장 많고, 다음이 「아이의 이름+아빠」로 25.2%이다. 한편 아이의 앞에서 가장 많이 쓰이는 호칭표현은 「아이의 이름+아빠」가 46.3%, 「여보」가 41.1%를 나타내 거의 같은 비율 이라는 것을 알 수 있다. 그리고 한선희(1996)의 남편이 부인을 부를 때의 조사결과를 보면, 들만 있는 경우는 「여보」가 50.6%, 다음으로 「아이의 이름+엄마」가 24.1%였다. 그리고 남편이 부인을 부를 때는 약간의 비율 차는 보이지만, 아이의 앞에서나 들만 있을 때나 같이 「여보」가 46.0%로 가장 많이 쓰이고 있었다. 다음으로는 「아이의 이름+엄마」로 32.2%이다.

홍민표(1999)도 한국인 부부의 호칭표현을 들만 있는 장면과 아이 앞에서의 장면으로 나누어 설문 조사를 실시했다. 조사대상은 서울과 대구에 거주하는 남성 133 명과 여성 100 명이다. 남성의 지역 비율은 서울 21.8%와 대구 78.2%, 여성의 지역비율은 서울 24.0%와 대구 76.0%이다. 남성의 직업은 공무원이 36.1%로 가장 많았고, 여성은 교사가 40.0%로 가장 많다. 홍민표(1999)의 조사결과는 한선희(1994, 1996)와 조사시기상 차이가 그리 나지 않음에도 불구하고 다른 양상을 나타내고 있다.

홍민표(1999)의 부인이 남편을 부를 때의 결과를 보면, 들만 있는 장면 「여보」와 「자기」가 똑같이 27.3%로 가장 많이 사용되고 있는데, 한선희(1994)에서는 많이 사용되지 않았던 「자기」라는 표현이 「여보」와 같은 비율을 나타내고 있다. 「아이의 이름+아빠」는 22.2%이다. 아이 앞에서는 「아이의 이름+아빠」가 41.0%로 가장 많고, 「여보」가 27.0%로 그 뒤를 나타냈다. 그러나 「자기」는 9.0%로 그 사용률이 대폭 준 것을 알 수 있다. 한편 남편이 부인을 부를 때에 대한 홍민표(1999)의 결과를 보아도, 한선희(1994, 1996)의 결과와는 조금 다르다. 한선희(1994, 1996)는 남편의 경우 들만 있는 장면이든 아이가 함께 있는 장면에서든 부인을 부를 때는 「여보」가 가장 많이 쓰인다는 결과를 나타내고 있다. 그런데 홍민표(1999)의 결과에서는 들만 있는 경우에는 「여보」(27.7%)이지만 아이의 앞에서는 「아이의 이름+엄마」와 「여보」가 똑같이 28.2%로 가장 많은 사용률을

또는 한국전체의 경향이라고 단언하는 것은 무리일 것이다. 조사결과를 정리하는데 있어서도, 이해하기 어려움 점이 있다. 일본어와 한국어 양쪽 다 부부간의 호칭 표현의 변종이 다양하므로, 대부분의 선행연구가 호칭표현의 종류를 단순히 「친족명사」나 「대명사」 그리고 「응답사」 등으로 분류하고 있다. 그러나 변종이 다양하기 때문에야말로 이러한 단순한 분류를 하면 안 되는 것이 아닐까. 예를 들어 일본어의 경우 같은 친족명사라도 「お父さん」「お父ちゃん」「父さん」「父ちゃん」「パパ」와 전부 조금씩 뉘앙스적 차이가 있다. 이들도 「さん」「くん」 불이냐가 「ちゃん」「くん」 불이냐가 아니면 이들로만

그리고 그 설문 조사에 있어서도 말의 변종에 관련된 사회적(출신지· 거주지· 직업· 학력· 계층· 지위 등)이나 심리적(성격· 그 상황에서의 심리적 상태) 요소가 고려되어 있지 않다. 실제로 설문조사 대상자의 거주지나 직업이 다르므로, 본 고에서 취급한 각 선행연구는 그 결과가 당연히 달랐다. 어느 특정 지역에 사는 사람들이나 어느 특정 직업에 종사하는 사람들을 대상으로 조사하여 얻은 결과를 가지고, 일본 전체의 경향이라고 단언하는 것은 무리일 것이다.

의식이라고 생각하는 편이 좋을 것이다. 그리고 그 설문 조사에 있어서도 말의 변종에 관련된 사회적(출신지· 거주지· 직업· 학력· 계층· 지위 등)이나 심리적(성격· 그 상황에서의 심리적 상태) 요소가 고려되어 있지 않다. 실제로 설문조사 대상자의 거주지나 직업이 다르므로, 본 고에서 취급한 각 선행연구는 그 결과가 당연히 달랐다. 어느 특정 지역에 사는 사람들이나 어느 특정 직업에 종사하는 사람들을 대상으로 조사하여 얻은 결과를 가지고, 일본 전체의 경향이라고 단언하는 것은 무리일 것이다.

3.1 선행연구의 한계

3. 설문

나타내고 있다. 한선희(1994, 1996)와 홍민표(1999)의 결과에 차이가 보이는 원인을 조사대상자에서 추측해보면, 확실희 다른 것은 여성이 직업이다. 한선희(1994)는 모두 주부를 대상으로 조사를 했지만, 홍민표(1999)는 주부의 비율이 21.0%에 불과하다. 다시 말하면 부부간 호칭표현은 직업에 따라라도 영향을 받고 있을 가능성이 있는 것이다. 그렇지만 한선희(1994, 1996)와 홍민표(1999)는 조사 대상자의 직업에 관해서는 전혀 고려하고 있지 않다.

부르는가에 따라 달라지며, 응답사 「おい」와 「ねえ」에도 각각 다른 뉘앙스를 포함하고 있다고 생각된다.

3.2 향후 연구과제

지금까지의 선행연구는 부부간의 직접 호칭 표현보다도 다른 사람에게 자신의 배우자를 언급할 때의 호칭표현에 초점을 맞춘 연구가 많았다. 부부간의 직접호칭 표현은 본론에서 다룬 소수의 예 밖에 없었으며, 그 용어나 연구방법에 있어서도 확실히 정리되어 있지 않았다. 그러나 본론에서도 언급한 것과 같이 米田 (1986)는 말다툼 중 일본 부부간의 호칭표현을 조사 했는데 그 결과는 보통 때의 표현과는 달랐다. 이것은 장면에 따라 변하는 화자의 심리적 상황이 호칭표현에 어떻게 반영되는가, 그 변화의 가능성을 조사한 것이라고 할 수 있다. 화자의 심리적 상황에 따라 상대에 대한 태도가 변하므로 호칭 표현도 당연히 변할 것이다. 이러한 관점에서, 앞으로 말다툼 중등의 경우뿐만 아니라 일상생활에서 일어날 수 있는 다양한 다른 장면에서의 부부간의 호칭표현의 변화를 조사하는 것은 매우 흥미로우며 중요한 일이라고 생각 된다.

앞으로는 선행연구에서는 불충분 했던 사회적 · 심리적 요소를 기본적으로 고려한 실태조사가 요구 된다. 특히 부부간의 호칭표현의 역사적 변화나 장면적 변화에 초점을 맞춘 한·일 호칭표현을 비교할 때, 그 배경으로 현대 일본사회와 한국사회의 부부관계의 변화를 고려할 필요가 있다. 이러한 연구에 의해 얻어진 결과는 일본인과 한국인 부부 이외에, 일반적 호칭에도 해당되는지 어떤지 또한 검토할 필요가 있다. 이러한 방향에서의 조사는 한일 양국의 상호 커뮤니케이션 행동 분석의 기초가 될 것이다.

注

1. ダニエル・ロング／中井精一／宮治弘明 編『応用社会言語学を学ぶ人のために』(世界思想社, 2001)을 참조 (pp. 125-126)

참고문헌

- 韓 先熙(1994) 「韓国では夫をどう呼ぶか —日本語との対照を交えて— 『ことば』 15, 70-88, 現代日本語研究会.
- 韓 先熙(1996) 「韓日両国にける呼称対照研究 —夫が妻を呼ぶ時— 『語文学研究』 4, 579-605, 祥明女子大学校語文学研究所.
- 米田正人(1986) 「夫婦の呼び方」 『言語生活』 7, 18-21, 筑摩書房.
- 홍민표[Hong-Minpyo](1999) 「한·일 부부호칭의 대조언어학적연구」 『일본학보』 43, 301-317, 한국일본학회.
- 이용덕[Yi-Yongduk](1998) 「한·일 양 언어에 있어서의 배우자 호칭에 관한 연구」 『일본학보』 40, 93-106, 한국일본학회.
- 이옥련[YiOckryon](1987) 「국어 부부호칭의 사회언어학적고찰」 『아세아여성연구』 26, 193-213, 숙명여자대학교.